

令和3年度 第1回八戸産学官連携推進会議

日時 令和3年10月12日(火) 14:00~15:00

場所 八戸市庁本館4階会議室A

○司会

ただいまから、令和3年度第1回八戸産学官連携推進会議を開催いたします。はじめに、本日本配りした会議資料を確認いただきたく存じます。本日の会議資料は、次第、出席者名簿、綴じられているもので、資料1「令和2年度第2回八戸産学官連携推進会議議事録」、資料2-1と2-2が綴じられています。「産学官連携による八戸未来創造中長期計画進行管理指標集計結果」、資料3「(仮称)八戸地域学の創設に向けた取組(案)」、資料4「地域を学ぶ講義に関する取組状況等に係る調査結果一覧」となります。過不足等はありませんでしょうか。それでは、議事に入りますので、小林市長に進行をお願いいたします。

○市長

それでは、しばらくの間、議長を務めさせていただきます。まず、「案件(1)令和2年度第2回推進会議の議事録」について、事務局から説明をお願いします。

○事務局

それでは、「令和2年度第2回推進会議の議事録」について、御説明申し上げます。資料1の「令和2年度第2回八戸産学官連携推進会議議事録」をお手元にお配りしておりますが、本日は要点のみ御説明いたしますので、後程内容を御確認いただきたいと思います。

前回の議事においては、今後の実施方針(案)について及び進行管理指標の見直しについての2項目に関して、委員の皆様から御議論いただき、地域を学ぶ機会の創出の重要性、国際化を見据えた対応、地域に関する学生主体での取組の推進、企業におけるデジタル化の動きなどについての御意見を賜ったところでございます。令和2年度第2回推進会議の議事録については以上でございます。事務局からの説明は以上です。

○市長

ただいまの説明に対し、御質問や御意見はありますか。よろしいですか。それでは、質問等はないようですので、以上でこの案件を終わります。

続いて、「案件(2)令和2年度の進行管理指標集計結果」について、事務局から説明をお願いします。

○事務局

それでは、資料2を御覧ください。こちらは「中長期計画」の進行管理指標のデータをまとめたものでございます。まず、1ページ目の一覧ですが、資料2-1になります。昨年度の第2回会議において改正した進行管理指標となります。続いて、次のページ以降のグラフを御覧ください。指針1から6まで、各項目の3か年の推移をお示ししておりますが、項目によって新型コロナウイルスの感染拡大の影響を強く受けている指標もありますので、特徴的な項目を抜粋して御説明申し上げます。まず、1-②「人材育成等に関するセミナー開催数」ですが、八戸市及び商

工会議所における開催件数が大きく減少しております。次のページにまいりまして、2-②「観光入込客数」や2-③「プロスポーツ観客数」も、大幅に減少いたしております。一方で、3-①「インターンシップ受入企業数」は微増となったほか、3-②「地元企業就職率」では、八戸学院大学短期大学部と八戸高専の数値が上昇し、八戸学院大学と八戸工業大学の数値が下降するという結果になっており、志す業種や専攻内容によって感染症拡大の影響の受け方が異なることが示唆されます。続いて、6-②「公開講座数」ですが、1-②「セミナー開催数」同様、大幅に減少いたしております。現時点で3か年分のデータを積み上げておりますが、今後、コロナ前後での数値の比較等も必要となることから、引き続き数値の動向を注視してまいります。進行管理指標についての事務局からの説明は以上でございます。

○市長

ただいまの説明に対しまして、御質問はございますでしょうか。質問等はないようですので、以上でこの案件を終わります。

続いて、「案件（3）（仮称）八戸地域学の創設に向けた取組（案）について」、事務局から説明をお願いします。

○事務局

それでは、はじめに資料3をご覧ください。まず、1の経緯についてですが、昨年度の本会議において、高等教育機関4校で共通講義の創設を目指すという方針が決定されたことから、今年度は各校の取組状況等に関する調査を実施し、創設に向けた課題の抽出及び具体案の検討を進めてまいりました。調査結果は資料4にまとめておりますが、特に課題の部分を抜粋し、2にまとめております。課題としましては、共通講義の創設にはカリキュラムの改定を要しますが、改定にあたりましては文科省との調整に多くの時間を要すること、また、既に工大、高専においては、それぞれ地域学に関する見直しを進めているところであり、現状の取組状況を見ると、4校一斉での講義開始は困難であること、加えて、会場や移動方法、費用負担などが課題として挙げられました。これらの状況を踏まえすと、共通講義の創設には、その調整に多くの時間を要しますことから、3の枠内のとおり、令和4年度の取組（案）をお示しするものでございます。具体的な内容ですが、まずは試験的な取組から着手し、段階的に事業を進めていく方針としたいと考えております。まず、「八戸産学官連携推進会議」を主催として、「地域」に関連した公開講座を年3回程度開催することを予定しております。この講義はウェビナー形式での配信とする予定で、学生はそれぞれの学校の教室等において、配信される動画を見ながら一斉に受講する方向で考えております。また、学生以外も聴講できますよう、講義会場には聴講希望者が入場できるような体制を整えたいという風に考えております。講義終了後においては、学生に対するアンケート調査を行い、受講した学生の意見などを翌年度以降の取組に反映してまいりたいという風に考えております。このほか、講義とは別に、商工会議所会員企業の各種会合において、八戸産学官連携推進会議の今後の取組に関する説明を行うことで、翌年度以降の本会議の取組に対する会員企業あるいは会員事業所からの協力を得られるように準備を進めていく予定でございます。

次に4の今後のスケジュールについてですが、先ほど申し上げました来年度の公開講座実施に向け、今年度中に講義テーマや講師の選定、既存講義の配信試験を行う予定でございます。また、来年2月14日に予定しております第2回会議において、試験配信の結果や来年度の取組内容について御報告する予定としております。その後の予定として、令和4年度の試験的取組を経まして、

令和5年度以降に共通講義としての創設を目指してまいります。

次に、別紙3参考としておりますパワーポイント資料を御覧ください。こちらは将来的な（仮称）八戸地域学のイメージをまとめた資料になります。将来的には年間15コマの通常講義として展開し、講義の半分を市、商工会議所から派遣する外部講師、残り半分を各学校個別の講義で構成する形式を想定しており、外部講師が扱うテーマは事前に本会議で定めたものとする予定でございます。講義はオンライン形式での配信とし、各校の講義室で一斉受講を基本といたします。また、講義はすべて録画し、授業時間外においても、すべての学生が自由に閲覧できるような体制を整備する予定でございます。この形式で実施することで、産においては学生や地域住民に向けた企業のPR活動や採用活動に活用可能となるほか、学においては企業との連携強化によるインターンの受入先や地元採用の増加、官としては録画した映像コンテンツを、八戸をPRするツールとして活用できることなどがメリットとして挙げられ、最終的には若者の地元定着につなげていけるものと考えております。

最後に資料4を御覧ください。こちらに今年度調査いたしました各校4校の取組状況と想定されるテーマ（案）をまとめてございますので、後程ご確認いただければと思います。案件（3）につきましての事務局からの説明は以上でございます。

○市長

それでは、ただいまの説明を受けまして、それぞれ御意見・御質問等も含めて御発言をいただければと思います。はじめに、水野学長からお願いします。

○水野委員

まず始めに、ちょっと話題は別なんですけども、学生のワクチン接種ということでこの4校が連携いたしまして、職域接種で市と皆さんの応援を受けて無事進行しておりまして、今週末で八工大さんが2回目接種ということでゴールに辿り着ける予定であるということで、改めまして4校を代表しまして御礼を申し上げたいと思います。ありがとうございました。

八戸地域学に関して2つ程。1つは、県の高等教育機関のモデル事業として今後も進めていくという方向で具体的な提案を進めていくということを提案させていただきます。実は、今年度、八戸市で青森県の高等教育機関の懇談会がございまして、今日お集りの皆様、学長・校長出席いただきました。そこで、来年度のテーマということで発表がありまして、来年度、弘前の弘前学院大学が主幹校で行われますが、そこでは大学連携による教育プログラムの共同開設の可能性について議論したいという、そういうテーマをいただいたところでした。今回ぜひとも、この八戸地域学、既に八戸ではこの4校が連携して開設を目指しているということで、合同で発表できるように準備進めさせていただけないかなというところがテーマのお願い、議論の1点目です。

それから2点目は、大学の共通講義として準備を進めていただいていますけども、八戸学院大学ではぜひともこれを系列校まで落とし込んでいこうかという議論も始まっています。例えば、八工大ですと系列高校をお持ちですので、大学の学びを少し高校レベルまで落としていって、この地で生まれ育つ高校生にこの地の魅力や強みを理解していただくという、そういう取組に発展できるのではないかなど。更にもっと言えば、中学・小学校の先生方に興味を持っていただいて、何か地域で一貫して八戸地域学として魅力、そして強みをしっかりと理解しながら育っていく。その先には、やはりこの地で頑張りたいという、そういう取組にも繋がっていくのではないかなという風に考えています。以上です。

○市長

ありがとうございます。続きまして、杉山学長、お願いします。

○杉山委員

八戸地域学につきましては大変期待しております。まず、短期大学は元々学生がほとんど地元というか、八戸だけではないですけども青森県南地域と一部岩手県北からほとんどの学生が来ておりまして、就職もその地域でする学生が多い。また、在学中に自分の地域の地域の施設で、実習等でお世話になるということもありまして、その地域との関わりが強く、実習でお世話になったという若干恩返しの意味もあって、地域貢献ということでいろいろとボランティアの要請がありますので、そのボランティアに行くなど、いろんな形で関わってきていますが、それを単にお世話になっているところへの恩返しということではなくて、この地域学というのがあることで、学生の教育の重要な柱としてしっかりと位置付けられるのではないかなと感じております。本学の短期大学全体としてのディプロマ・ポリシーに「郷土を愛する心」という言葉を使っていますが、そこもしっかりリンクしますし、ぜひこの八戸地域学をしっかりと育てていきたいなと思っております。

質問としては、この資料3の「外部講師の講義」と「大学独自の講義」ということで半々くらいでイメージになっていますが、大学独自というのは、それぞれ各学校でコンテンツを変えるといような意味なのか、この辺はもちろんこれから検討するところですけど、その辺のイメージがちょっとピンとこないのがありましたので、少し補足説明がいただけたらと思っております。以上です。

○市長

ありがとうございます。では今の点について田中先生お願いします。

○事務局（田中教授）

イメージといたしましては、現在、八戸学院大学につきましては地域文化論という講義を現在進めております。市長にもお世話になっておりますけど、各校でも資料4にごございますけれども、今後地域学を展開していくというふうに予定しておりまして、杉山学長から御質問いただいたものにつきましては大体7コマないしは8コマ程が共通の講義ということで進めていきまして、残りのコマにつきましては、各校独自の教員ないし外部講師の方をお願いをするということを、現在のところはイメージいたしております。以上です。

○市長

よろしいでしょうか。

○杉山委員

はい、ありがとうございます。

○市長

ありがとうございます。それでは圓山校長の方からお願いします。

○圓山委員

こういうのが具体化段々してきたということは大変ありがたいことですし、田中先生はじめ色々苦勞されておられますこと御礼申し上げます。ちょっと異なる視点から、ざっくりしたと

ころから外観と、細かいところ2点ちょっとお話をさせていただきます。

実は、私は前職東北大学でありまして、あそこにも大学が山ほどあるので単位互換制度をやりましょうとかやって、意外と動かない。やっぱりレベルも違うし、目標も違うし、色々なんで。それはコロナの前で、対面授業をやりましょうとかそういう形でガチガチのカリキュラムの中に一緒にやりましょうという、各大学なかなかそこまでできないということがありまして。仕組みはあるんですが、あまり動かなかったという経験がございます。

そして、最近の情勢というのを考えたときに、各大学、高専もそうですがコロナのお陰様で、みんな必死になって遠隔授業のコンテンツを作るとか、コロナにかかった、かかりそうな学生は学校来なくていいけど、そのかわり遠隔授業で配信しますとか。各大学さんそれぞれ工夫されていろんなものができていて、時代が変わったと思っています。つまり、今、全国の大学でやっておるように対面授業と遠隔がハイブリットでやることもできるようになってきた。それを、学生も先生も慣れてきたという条件が、私が前職で東北大学にいたときより随分変わっていると思います。ですから、やはり、ここにも書いてあるように、キャンパスも違いますし、学生の素質も違いますし、いろんな違う大学が八戸学というので1つのゆるっとした括りの中で共通授業を持つというのは今がチャンスというか、今が良い時期かなと考えてございます。

それで、今度は細かい話をさせていただきます。それじゃ、やりましょうというのはいいのですが、先程言ったように東北大学ではうまくいかなかったのは、ガチガチにこう、例えば、私であれば熱工学とか熱力学とか、そういう学問体験をお互いにやりましょうと言っても無理なんですね。みんなレベルも違うし。だけど、今回はそういうことで遠隔授業のコンテンツが出来る、外部講師も遠隔事業でやることができ、それはオンデマンドですのでライブでやらなくてもいい。そうすると、各大学さんの状況に応じて、その講義の中で八戸学の色々なコンテンツを自由に組み込んでいくと先生方の負担も減るし、そういう形で導入する。だから、こうやらねばならんとか、八戸学で何単位という資料を見せていただくと、例えば、八学さんと高専大も全然時間数も違うし、科目も違う。だけど、非常に魅力的な講義とか外部講師のお話があれば、先生方はそれを既存の授業の中で遠隔で取り入れることによって、オンデマンドだったら時間割関係ありませんからね。そこで学生に聞かせて、レポート等はその先生に送るなり所管する先生がやるなり、それは自由なんです。そういう形でやると先生方の手間も減る。つまり授業を1つやらなくてもいい、ちょっと雑なんですけども。そういうこともあって、お互いにwin-winになって、その中で八戸の地元を盛り上げようという気持ちがそれぞれの大学の講義カリキュラムに合わせて、最初は数コマ入れて、今度は半分ぐらい入れましょうか。それは、担当の教員が八学さんのこの講義面白そうだし、工大さんのこれは面白そうだから、これとこれを組み合わせて何コマ目と何コマ目はこれでやりますという形でやるとサスティナブルにもできるし、そういうことをやることによって、高等教育機関の学生諸君が上手くいくのかなど。

それからもう1点。これは補足ですが、先程、水野先生がおっしゃられた高校まで展開するということがあります、本校は今の段階では想定しなかったんですが、実はうち高校もありますので。付属高校ではないんですけど、高校1年生からおりますので、我々、低学年と申しておりますが、1～3年の学生用にそういう授業科目を設定していただければ本校でいろいろトライをして、先程言ったように丸々なんとか学を全部カリキュラムに入れるというのは、我々も文科省の許しもいただきゃならないし、いろんな上で大変なので、一部の講義の中にそういうものを少しずつ斑に入れてくるというのは教員の裁量の中に入りますので、そういうことでやれたらいい

のかなと。そういう形で水野先生がおっしゃられる高校まではできるし、そこから先、中学校のやつはもう少し今度は練って、小学校・中学校も来年からオンデマンドで配信できるかなと。実は中学校もオンライン授業に慣れているみたいで。この前、八戸高専が、青森県が緊急事態宣言やったのでオープンキャンパスできなかつたんですね。中止になったのでオンラインオープンキャンパスをやったんですけど、200弱ぐらい来たかな。中学生がスマホなりパソコンでアクセスしてくれて、そして、質問なんかも活発に中学生が出したりしてますんで。あの子たちはもう大体遠隔授業に慣れているんですね。ですから、そういう形でやれば、中学校までの展開も可能なのかなと。3つ目は少し雑談ですが、そういうことでございます。以上です。

○市長

ありがとうございます。続きまして、坂本学長お願いします。

○坂本委員

今いろんな御意見を伺ってですね、私の頭の中でもまたふつふつと違う考えなんかも浮かんできたりしていますが。特に、水野学長先生が言われた、高校まで落とし込むというのは、なるほどというのも、本学部も当然高校ありますのでそういったことを考えていたのですが。ふと、そういう細かいところのやり方というのは定められた講義の中からピックアップしてやったりするのは大変なことだろうなというのはあるんですけど、ちょっと大雑把な視点で見るときに、この大学という高等教育機関というところで見るときに、この4校が同時に1つのプログラムを学生さんが受けるということの意味ってなんだろうと、今朝も考えたりしていたんですけども。やはりこの地域によって私たち4校が、それぞれの学生さん生徒さんたちが、この市というかまとまった考えの元でその教育を受けることができるんだという喜びとか、それから、実際講義に携わる市長さんだったり、地域の企業さんだったりした方々ですね、私たちはこのどここの大学の学生さんに対してじゃなくて、高等教育機関の全体の若者に対して、地域を育てるためにこういう風に言いたいんだよということを言っていただくということ。そして、市民にとってはですね、八戸市ってそういう風な教育をみんなにやろうとしているのかということをすごく誇りに思えたと思えば良くやっている。それが知的エネルギーに変わって行ってですね、地域の活性化に繋がっていくのかなと考えていたりしておりました。

今度は、杉山先生の御質問にも関連してくると思うんですけど、例えば、今回の提案されている15コマのうち8コマを外部でとったときに、多分、なかなか擦り合わせというのが難しいことになりますので、それぞれの立場でそれぞれの企業の方とかが話すわけですけども、それを各校・各大学・各高専でどういうふうにそれを学生さんに伝えて落とし込むかっていう作業が今度は大事になってきますので、それをインターフェース的な役割というかコーディネート的な役割として繋いでいくのが、来年は残りの7コマを各校でやるってことなのかなと私は認識しています。それが段々軌道に乗ってきたときに一丸となって、1つの社会人グループと学生グループと、それと市民グループという形の中で、うまく軌道に乗ってきたときに、八戸の教育の姿勢って面白いよねと、本当のモデルになっていくのかなと感じたところです。最後にちょっと余計な話になりましたけども、以上です。

○市長

ありがとうございます。続きまして、河村会頭お願いします。

○河村委員

非常にみなさん高尚な話をされていますので、一般市民から何からお話していいのか分かりませんが、実は、私は今、皆さんのお話しの中で、ちょうど28の辺りから地域の活性化というんですか、コミュニティというテーマでいろんなことをやってきました。たまたま今から30何年前ですけれども、私は青年会議所というところの団体に所属しておりまして、その中で「ラブはちのへ運動」というのがありました。これがびっくりするほどに、東京のJCの会長になった「わんぱく相撲」と八戸の「ラブはちのへ運動」と決勝戦になりまして。八戸の奴らはみんな、負けるから誰も来なかったんですよ。私はそのとき専務をやっていたものですから、専務が出ると言うんで出たら、最優秀を取ったんですよ。これはなぜかという、要するに多くの市民の人たちがこのまちに注目して、このまちを一人一人が良くしようという運動なんですね。最初は私共も分からなかったんですけども、どここの大学の先生を呼んだり、いろんな形をやったんですけども、結果的には終わるとそのときは良かった良かったというんですけども、1週間もしないうちに全部忘れてしまう。そういう繰り返しをやってきましたし、それからいろんな形で市民の方々に我々の思っているのをみんなでいいまちを作ろうということがテーマなんですけれども、簡単に言えば1つはですね、色々アンケートをやりました。その中で、多く出てくるのは、いわゆる生活環境を良くすることがこの地域に住みやすいという条件を作ることが、ある程度結論付けられました。その生活環境を良くすればいいんだということだったんですけども、それに基づいて市民の方々にアンケートを取りました。アンケートを取ったときに、この八戸は住み良いねと言ってくれたところが、一番生活環境が悪い所だったんです。これは市長の前ではしゃべりづらいんですけど、湊地区ですね。その当時、30何年前ですから、道端にイカを干してあったり、魚の臭いがブンブンする。それも生活環境のレベルから見たら最悪の状況だったんです。我々から見て、一番生活環境に恵まれているなというのは、実は根城地区。あの頃は、ちょうど根城がリング畑の山だったんですけども、そこがちょうど住宅地になって綺麗に道路が整備されて、しかも将来的には高速道路を通す、駅の尻内が近い。そういう環境から見ると、水道やなから見ても生活環境が整っている場所。ところがですね、アンケートを取ったら、一番住みやすいって答えたのが湊なんです。イカを生干しして、皆さん経験あるかないか分かりませんが、我々海に行くと、イカの1枚や2枚かっばらって、臭いの中で遊んでいたわけですけども、そこに住むイカを作っている水産業のパートのおばちゃんたちがすごく多かったんですけども、その方々が、このまちくらいいいとこがない、ここはいいとこ。逆に、根城地区の人たちが、このまちは住みにくいと言うんですよ。アンケート取ったら、我々が一番いいだろうと思って期待している根城が一番悪くて、湊が一番生活環境の、イカを生干しして魚の臭いがするこの人たちが、ここが一番はいい場所だという答えがなったときに、いろいろ検討したんですけども、焼山って十和田の入口に温泉があるんですけども、そこで合宿何回もやりました。徹夜で議論したこともあります。なんでこうなんだと。我々が目指した住み良いまちってなんだろうかと。我々が目指すところの1つの例は、根城じゃなかったのかと。ところが、全く違う湊の人たちがいいって言うまちだ。なんだろうというんで、これを議論して、何回か徹夜で話したことがありました。夜が明けるまでやって最終的に出た結論が、ここに集まっている人たちはこの八戸が好きなんだと。だから、このまちを良くしようという気持ちがあるんだ。じゃあ、こういう市民を一人でも多く作った方がこのまちにとってはプラスになるんじゃないかということからやりましてですね、それをもとに、秋山市長のときでした。第1回目の「市民の夕べ」をやる、「ラブはちのへ運動」始

めるときに八戸の歴史を基本的に、ずっと湊から始まっていった、歴史とか、いろんなその時代の流れを話してやったら、ちょうどあのとき学生、大学の方々、夏休みかなんかで来たとき、パッと手を挙げて「私、実は、八戸に住みたくなかった。」パッと見たらかわいい子がいるんですよ。この子に発言しようと、私場内でアナウンサーやっていたから、「どう思いました？」って言ったら、涙を流して「私は八戸に帰ります。」あのときはびっくりしました。そのときに、八戸に帰ってきて、私は八戸を良くするんだという話をされたときには感動しましてね。そのとき千人入ってまして、みんな拍手して喝采しましてね。最後に秋山市長のまとめを言うつもりだったんですけど、秋山市長が感動したのか涙を流してもう言えなかったんですよ。その運動をしたときに、これはどういう形で根付かせるかということで、みなさん御協力されて、学校にやろうということで最初いろいろ考えたのは、あんまり難しい話をしてもだめだから、おらんど素人だから小学校から始めるか、中学校から始めるかと議論しているときに一番先に手を挙げたのは小学校でした。小学校へ行きましたら、最初に行ったときに「お前講師やれ」というので一生懸命話をしたときに、小学校の1年生から6年生が真剣に聞いてくれました。八戸はこういうまちだよって話をしたら非常に喜んでくれて、それから先生方が八戸の元とか、さまざま声が掛かりましてですね、八戸の学校だけで100校ぐらい歩きましたね。それと同時に、子どもたちと話ししているうちに、みんな目を輝かして聞いてくれるものですから、一生懸命真面目にやった記憶があります。そういう形でやってきたときに、地元のわりには、学校の先生が地域学をやっていないですよ。小学校の先生方は地域の勉強をしてない。それから、それを学ぶ機会もない。だから、学校の先生方に少し話したら「おらんど分かんないんだよ」と。そういう話になって先生方を集めて講演したときもありましたし、様々そういう話でやってきましたら、ようやく学校の先生方もそれに興味を持ってくれるようになりました。

そうやってやりまして、我々が民間団体としてやりまして、「ラブはちのへ運動」八戸を愛する運動ということで、ネーミング付けてやりました。生意気なようですけれども、それで東京の「わんぱく相撲」、当時やり始めて今でもわんぱく相撲すごかったですけども、そこはその運動に「ラブはちのへ運動」が勝つとは思いませんでした。その当時、八戸と言っても誰も知らないんですよ、八戸どこさあるか。他の人は岩手県だとか秋田県だとか。私は冗談に言うわけですよ、「それ秋田県だよ。」と。「ほらみろ。」と言っている。そのぐらいの知名度しかなかった。八戸が知名度ができたのは新幹線通ってからですよ。初めて全国区になったのは、東京駅で「八戸着何時何分」となって、初めて全国区になった気がします。いろいろ話しをする先生方、すごく難しい言葉知っているのですが、私は八戸弁で話しをする感じになりますけども、私のやってきた「ラブはちのへ運動」というのは、そういう意味で青年会議所ときに最優秀賞取って、ちなみにそのときの会頭が麻生太郎さんでした。壇上行って、それから麻生さんと仲良くなりまして、時々八戸に遊びに来て一緒に酒飲んでます。そういうことから考えるとですね、例え地域の運動というのは非常に身近な話、隣の町内の話でもいいし、隣のお寺の話でもいいし。わりとそれを知らない人が多いものですから、そういうたわいのないことで目覚めるといいますか、そういう経験があったので、素人の話で大変皆さんと違うかもわかりませんが、報告させていただきました。

○市長

どうもありがとうございます。進行シナリオで「ここで市長からの一言」と書いてありますので、何かしゃべらなきゃいけないんですけども。

まず、田中先生の方で前回の議論を踏まえて整理していただいて、全体的な体系のイメージと

どうか、それをまず作っていただいたことに感謝申し上げたいと思います。そして今、それぞれ学長、校長先生、会頭から本当に様々な角度からお話をいただきました。それぞれお話いただいた内容を、漠然と結びつけていくと八戸学といいますか地域学としての八戸の方向性が出てくるのかなというふうに聞かせていただきながら感じたところです。それは、かなり幅広い裾野を持った形での、ある意味いろんな角度から八戸を見ていくと。それは学問分野でいうと純文的なあるいは歴史学的なところから、まさに工業都市でもありますし産業都市でもありますので、そういう産業の分野であったり、あるいは、非常に伝統文化、祭りもそうですけども、根付いていますので、そういう繋いできた伝統文化であったり、いろんな角度から切り口はたくさんあるなど思っていました。やはり、「学」にしていく必要があるかなと、せつかく地域学というネーミングを掲げる以上は、まさにそれぞれの高等教育機関の先生方が知恵を絞って紡いでいくような、そういう方向性を持ちながらスタートしていけばいいのではないかと思っています。無理のない形で、それぞれの教育機関あるいは産業関係の皆さんも係わるとは思いますけども、無理のない形で展開をしていくと。歩きながらというか走りながらなのかもしれませんけど、形作られていく過程も楽しみながら進めていければいいのかなと思っていました。多分、全国にそういった取組はあると思うんですけども、これまで日本を支配したというか権力を握った皆さんが歴史は書いてきたと思うんですけど、我々とすると、つい最近、明治維新のときに負けていますので。それは何かという、もうちょっと溯るとこっちが中心だったという話で。私も東北大学でたかはしみお先生という人がいて、もう亡くなりましたけど。昔、東北地方の中心だったということを繰り返して教えられてその気になった記憶がありますけども、なんかそういうことがまた出てくるようなですね、楽しい方向性も将来あれば面白いなということも含めて。縄文時代まで遡ればこちらの方が勝っている。時の流れの中で、色々力関係は変わるんだということも含めて、何かしらこう、高等教育機関だけではない、産業分野や文化・芸能も含めた中ですね、新しい形の地域学の1つのモデルができればいいなと、今お話を聞かせていただきながらちょっと考えたところです。また、田中先生には頭を悩ませますけども、今日の議論も踏まえてですね、次の形といいますか、今日の先生方のお話も含めて新しい形にしていいただければと思いました。よろしくお祈いします。一言で終わらなかつた感じもしないでもないんですけども、この際にかお話があればと思いますけども、よろしいでしょうか。それでは、この件についてはですね、以上にさせていただきます。

次に、「その他」ですが、何かございますでしょうか。よろしいですか。それでは、ありがとうございました。さっきしゃべったことがセリフに書いていますけど、本日いただいた各委員様の意見を踏まえながら、事務局として次回の会議にて進捗等の報告をお願いしたいと思います。それでは司会の方へ進行をお返しいたします。

○司会

ありがとうございました。最後に、今後のスケジュールの確認でございますが、次回は令和4年2月14日の開催を予定しております。開催が近づきましたら、改めて御案内差し上げますので、どうぞよろしくお祈いいたします。

それでは、これをもちまして、令和3年度第1回八戸産学官連携推進会議を終了いたします。本日はありがとうございました。